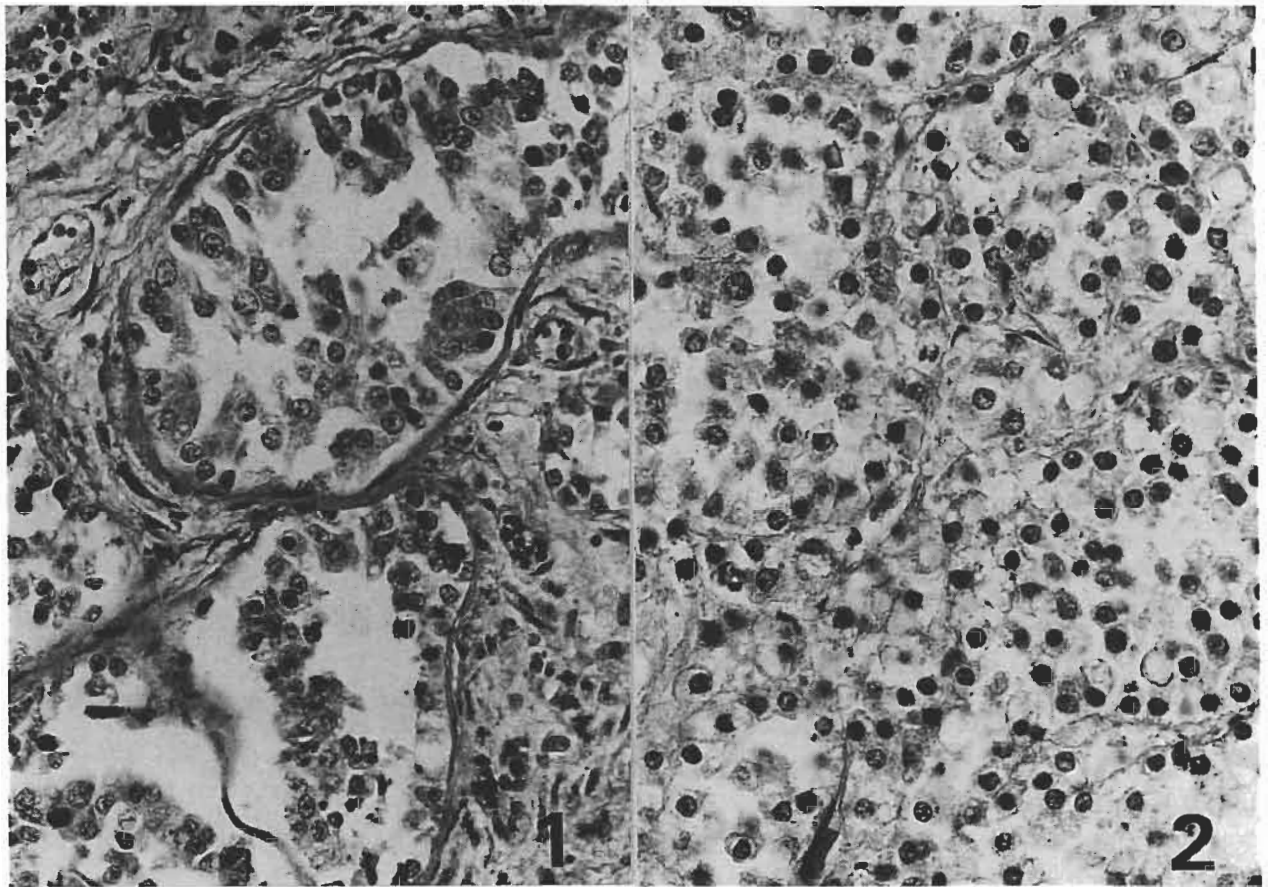


犬の肝及び腸骨リンパ節の腫瘍

東京大学農学部獣医病理学研究室出題 第34回獣医病理学研修会提出標本No.622



動物：犬，ミニチュア・シュнауザー，雄，12才。
臨床事項：1991年8月より乳腺腫大，血尿，精巣腫脹，腹困膨満の症状を呈し，1992年10月に本学家畜病院で腫大精巣を摘出。腹腔内では両側の精管が嚢胞状に拡張しており同時に摘出。肝と腸骨リンパ節に腫瘍を認めたが，処置はしなかった。その後シスプラチン投与を続けたが，腫瘍は徐々に大きくなり，1993年3月に脾に新たな腫瘍を確認，再手術で脾摘した。腸骨リンパ節と肝の腫瘍は摘出不能。同年4月30日死亡。提出標本は腸骨リンパ節と肝の腫瘍の切片である。

剖検所見：腹腔内には血様腹水が少量貯溜，腰部背側腹壁には腹大動脈に沿って胡桃大～鶏卵大の腫大リンパ節が5～6個存在。肝には帽針頭大～小児拳大の白色腫瘍が全葉にわたり散在，一部の腫瘍では剖面より乳白色の混濁液が流出した。大脳のクモ膜下，消化管粘膜，腎，心に出血が見られた。

組織所見：肝の腫瘍内部では腫瘍細胞のび慢性無秩序な増殖が見られ，出血巣や小型壊死巣も観察される。増殖巣辺縁部では長楕円形～類円形の腫瘍細胞

による管腔構造が目立った。腫瘍細胞は大型淡明な核を有する類円形で密な増殖を示した(写真1, HE)。細胞質中に空胞を有するものも観察された(写真2, HE)。脂肪染色により腫瘍細胞の細胞質中に多量の脂肪の存在を確認し，蛍光観察で不飽和ステロイドに特徴的な緑色の自己蛍光を観察したことから，ある種のステロイドホルモンを分泌する腫瘍と考えた。他臓器の変化では前立腺で腺上皮細胞の扁平化が見られ，骨髄では低形成が認められた。

診断及び考察：本症例は「セルトリ細胞腫の肝及び腸骨リンパ節への転移」と診断した。セルトリ細胞腫は転移の少ない腫瘍として知られるが，悪性転移の報告もまれに見られる。本症例はまた組織像からも悪性を示すものである。セルトリ細胞腫ではエストロゲン産生が知られるが，本症例でも脂肪染色及び自己蛍光により腫瘍細胞のステロイドホルモン分泌が示唆され，その影響として骨髄低形成，出血傾向が現れたと思われる。また前立腺上皮の扁平化にもエストロゲンの関与が考えられた。